

YNAC 通信

2016.08.01 No.33

いつまでも中世ではられない

小原比呂志

「屋久島に他国の船舶が漂着・停泊すると多くの者が島民によって殺害される」

思わずギョッとするが、これは屋久町郷土誌第4巻に引用された明の謀報資料『日本一鑑』の文章である。1560年代に実際に調査・編集されたものだ。

あまりにも衝撃的なのでよく調べてみると、これはどうも鎌倉時代以前に一般的だった「寄船」という慣行で、漂着した船の積荷はその土地に所有権があるとみなし掠奪してよいというものだったらしい。地方によっては夜間暗礁に船を誘導し難破させるようなこともあったという。これらは西南日本の倭寇の活動とも連動したかもしれない。

この手荒な慣行は、鎌倉～室町時代に、入港に際し寺社への寄進を強要する「津料」というものに変化した。中世の、地域の自立発展に伴う自意識の強まりが、縄張り内の権利意識を肥大させ、それが訪問者への負担増大をエスカレートさせたのである。「寄船」は受け身の海賊行為だが、「津料」は、それがスマートにシステム化されたものだ。

このような、ローカルな自意識のままに来訪者から金をむしり取る慣行が成り立たなくなったのは、外洋航海のできる造船技術が発達したためだ。航続距離が飛躍的に伸び、多額の負担を強いる港などは、廻船に無視されるようになったのである。そしてまた広域化した自由な流通が経済の安定をもたらすようになり、戦国大名は津料を制限し、港湾整備に投資するなど、廻船の利便性を図らざるをえなくなった。安土桃山時代以降この動きは全国に定着し、江戸時代の経済発展へとつながったのである。

400年後、屋久島は世界遺産の時代を迎えた。残された自然の質の高さが評価され、島に誇りを持てるようになった半面、観光客は神聖な山を荒らしているなどという思い込みから、迷惑なので〇〇協力金を取ろう、と訪問客に対してあっちでもこっちでも負担を強要するような風潮が目立ってきた。一方海路も空路も一部企業に独占され高値が維持され、来島者はじりじり減少している。

自意識の高まりと利用者の負担強要増という今の姿は、なんのことはない、中世への退行に等しい状況ではないか。

もっとも、そうであれば応用可能な解決策もすでに中世に経験済みである。島への路線に競争原理を再導入して利用者負担を減らし、筋の通らない金銭徴収を止め、サービスの高品質化を図る。経済に目覚めた戦国大名の打った手が、そのまま応用できるだろう。温故知新ということばはまさに今の屋久島のためにある。

しかし、世界遺産の条文には「世界のすべての国民の遺産」「人類全体のための世界の遺産」と書かれている。つまり屋久島はすでに地元の資産であるだけの存在を越えて、世界の人々のためのものに昇華している。世界遺産を誇るのはいいが、訪問客を批判しながら同時に来島数激減にいらだつという矛盾はいいかげんに解消する必要がある。いつまでも中世のままでいてよいものではない。

エコツーリズムをベースに持続可能な方策を様々に工夫し、世界中の屋久島を想う人々に対して、ここはあなたのための遺産であると迎え入れる。それが未来に向かって屋久島が負い続ける責任と権利ではないだろうか。

白谷雲水峡のシカ個体群の崩壊について

市川聡・古賀顕司（フォトレック代表）

はじめに

YNACでは、長年白谷雲水峡において、フォレストウォークのツアーを実施してきた。屋久島の中でも、20年以上前から、ヤクシカと出会いやすい場所として、紹介してきたのがこの白谷雲水峡である。しかし昨年の夏以来、個体数が急減し、突然個体群が崩壊してしまった。

ここに1995年から2015年までの21年間の白谷雲水峡での個体数の変遷を明らかにすると共に、個体群崩壊の原因について考察したい。

方法

白谷雲水峡において、楠川歩道から入り、苔むす森まで行き、原生林歩道を引き返すという周遊ツアー(約4.25km)中に調査を行った。10時前頃に駐車場を出発し、17時頃に白谷雲水峡の入口に戻ってくる1日コースであり、ほぼ同じ時間帯に同じ場所を通過するといった、一定のコースタイムで目撃したシカの数、雌雄別、年齢などを記録した。また縄文杉トロッコ道では、歩きながらシカの死臭がするポイントを数えた。同じポイントは前回の死臭がにおわなくなるまでカウントしていない。死臭は、1週間ほどで臭わなくなる。

表1.年度別・性年齢別目撃個体数の平均値

年度	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15
調査日数	22	17	21	33	27	24	23	12	20	15	14	20	14	17	17	12	17	23	9	12	14
雄計	0.86	1.00	0.71	0.91	0.93	1.04	0.52	0.58	1.15	0.80	1.07	1.10	1.29	2.06	2.00	2.42	2.00	2.39	3.22	1.92	0.36
落角	0.00	0.12	0.05	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	0.25	0.00	0.00	0.00	0.14	0.29	0.53	0.00	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00
袋角	0.18	0.06	0.10	0.03	0.04	0.17	0.00	0.25	0.00	0.00	0.07	0.05	0.07	0.12	0.12	0.42	0.53	0.57	1.22	0.25	0.00
4尖	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
3尖	0.23	0.47	0.33	0.27	0.33	0.33	0.39	0.33	0.40	0.53	0.79	0.90	0.43	0.59	0.76	1.42	1.18	1.61	1.78	0.58	0.00
2尖	0.00	0.00	0.00	0.12	0.19	0.17	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.07	0.41	0.06	0.00	0.06	0.09	0.11	0.33	0.00
1尖	0.09	0.06	0.00	0.15	0.22	0.13	0.04	0.00	0.05	0.07	0.07	0.05	0.29	0.06	0.24	0.25	0.06	0.00	0.11	0.25	0.00
1歳	0.36	0.29	0.24	0.30	0.15	0.25	0.09	0.00	0.45	0.20	0.14	0.10	0.29	0.59	0.29	0.33	0.18	0.09	0.00	0.50	0.36
雌計	3.23	3.00	3.29	2.85	3.59	3.46	2.13	3.00	3.95	3.47	2.64	4.25	3.43	5.00	3.94	4.17	3.41	3.39	2.44	2.67	1.21
単独	1.23	1.35	1.48	1.79	2.15	2.63	1.26	2.08	2.05	1.93	1.93	2.65	2.00	3.47	2.76	3.33	3.06	2.00	0.78	1.83	0.64
親	1.27	1.18	0.95	0.82	1.00	0.50	0.52	0.67	1.35	1.13	0.50	1.05	0.93	1.00	0.71	0.42	0.29	1.26	1.22	0.67	0.29
1歳	0.73	0.47	0.86	0.24	0.52	0.33	0.35	0.25	0.55	0.40	0.21	0.55	0.50	0.53	0.47	0.42	0.06	0.13	0.44	0.17	0.29
当歳子	0.45	0.82	0.14	0.70	0.59	0.29	0.17	0.67	0.90	0.80	0.29	1.00	0.71	0.88	0.29	0.25	0.24	1.39	0.89	0.83	0.07
雌雄不明	0.00	0.12	0.19	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.05	0.13	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
総計	4.55	4.94	4.33	4.52	5.11	4.79	2.83	4.25	6.05	5.20	4.00	6.40	5.43	7.94	6.24	6.83	5.65	7.17	6.56	5.42	1.64

結果

年度(4月~3月)ごとの目撃頭数の平均値を性別・年齢別に表1にまとめた。調査は年間最大33日、最少9日間、平均で年間約18日間行われた。

白谷雲水峡では4尖雄は目撃されておらず、全て3尖以下であった。このうち角座のみまたは角座からごく短い角しか伸びていないものを1歳雄とした。またこの年度に生まれたシカは当歳子として記録した。

総目撃頭数の変化を図1に示す。1995年から2000年の最初の6年間は4.33頭から5.11頭(平均4.7頭)と比較的安定して推移し、安定した個体数が維持されている集団と考えられた。しかし2001年に個体数が減少したあとは、増減を繰り返しながらも、全体としては増加を続け、2008年には平均7.9頭とピークを迎え、最初の6年の平均に比べ約1.7倍まで増加した。2009年から2013年までの5年間は、5.65頭から7.17頭(平均6.5頭)と多少増減はあるものの、最初の6年間に比べて、約1.4倍の高値で安定していた。これが2014年から減少傾向を見せ始め、2015年には平均目撃頭数が1.64頭と急減し、個体群が崩壊した。

以上の年変化を雌雄・当歳子別にまとめたものが図2である。雌は前半は総目撃頭数と似た動きをし、最初は比較的安定した個体数を示し、2001年以降増加に転じ、2008年にはピークを迎える。しかしここから、減少に転じ、2015年に崩壊する。

一方雄は、1995年から2006年くらいまでの間

は、ほぼ横ばい安定しており、その後増加を続け2013年にピークに達し、このとき初めて雄の目撃頭数が雌を上回った。その後2014年、2015年と急減し、崩壊した。

ということは、2009年から2013年までの間は、雌は減少し、雄が増加することで総目撃頭数が安定していたということになる。

当歳子に関しては、メスの増減と似た変動をする傾向があるもの、変動幅は小さい。2015年にはほぼ0頭となった。

一方縄文杉トロッコ道沿いでは、2015年に2.6~4.2倍もの死体数の急増が見られた。(図7)

考察

白谷雲水峡のシカの目撃頭数の変化をまとめると以下のようなになる。

1995年から2000年までの6年間は、比較的低密度の安定期と考えられる。その後2001年にかけて小規模な崩壊があり、いったん個体数が減少するも、その後変動を繰り返しながら徐々に増加し、2008年にはピークを迎える。その後2013年にかけて高密度安定期となり、2014年、2015年で大崩壊する。

これを見ると、安定→崩壊→増加→安定といった繰り返しがあるように感じられる。

白谷雲水峡の場合、まわりと森林が接していることから、閉鎖系ではなく完全な開放系であり、ここだけの状況で変動を考察することは難しいが、常緑樹の森では安定状態は長く続かず、崩壊→増加→安定を短期間で繰り返している可能性が考えられる。

このような自然の増減であれば問題はないが、今回の大崩壊はあまりにも急激で壊滅的であった。もう少し細かく2015年度の動きを紹介すると、9月頃までは前年度とさほど変わらなかったが、10月以降急減し、11月以降はほとんど目撃できない状況となってしまった。つまり夏以降に急激な変化が起こったと考

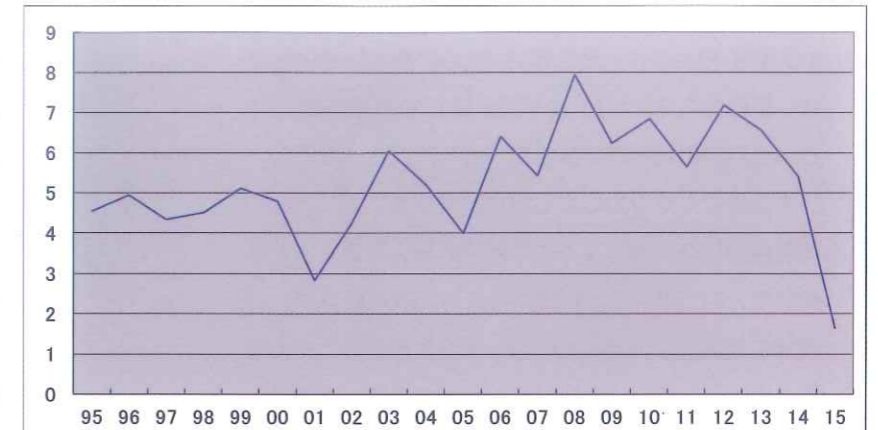


図1.一日あたりの目撃頭数の年変化

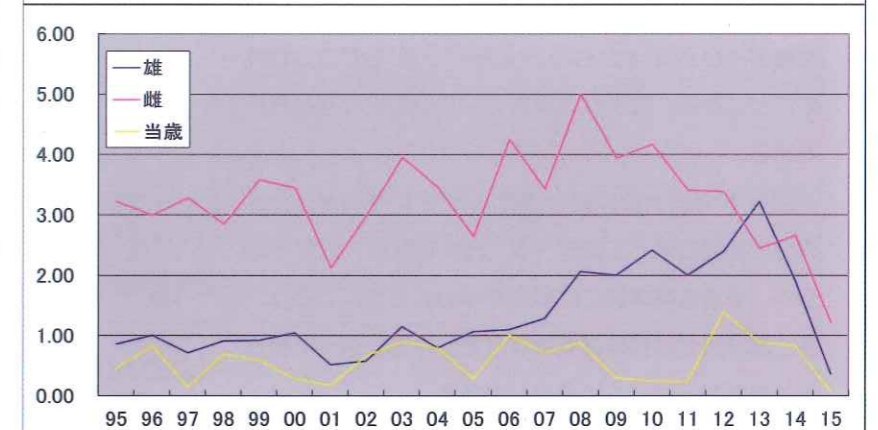


図2.雌雄当歳子別目撃頭数の年変化

えられるのである。

白谷雲水峡のツアーでシカを1頭以上目撃する確率を図3に示す。これまでほぼ90%以上シカを目撃することができるのが白谷雲水峡で、特に2006年から2013年までの間、8年間は目撃率100%であった。これが2015年度には57%まで減少しているが、先に述べたように10月以降に大崩壊したことから、10月以降の8回の調査に限っていえば、目撃率は25%となり、ほとんどシカがいない状況となってしまった。これは白谷雲水峡で観光資源としてのシカを失ったということでもある。

それではこの大崩壊はいったいなぜ起きてしまったのであろうか?屋久島では近年シカが増えて様々な悪影響をもたらすということで、大量捕獲が行われている。2007年以降の捕獲実績を図4に示す。2009年まで年間200~300頭程度の捕獲数であったが、2010年度よりシカ1頭当たり駆除した際の報奨金が5000円となり2年で10倍程度まで急増する。更に2013年度からは1頭あたりの報奨金が

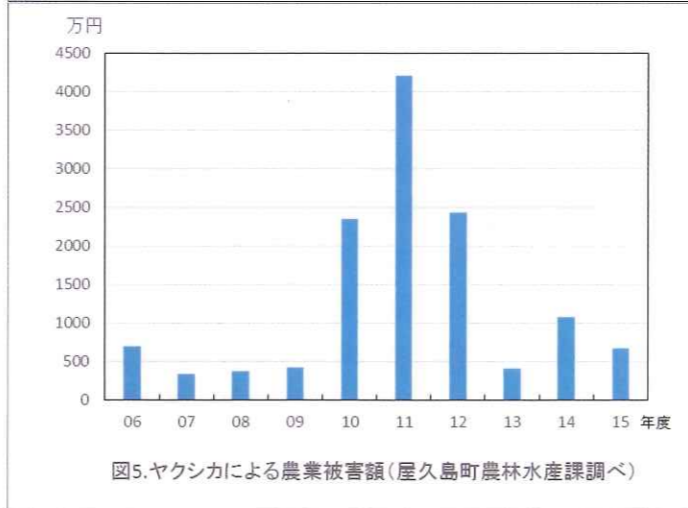
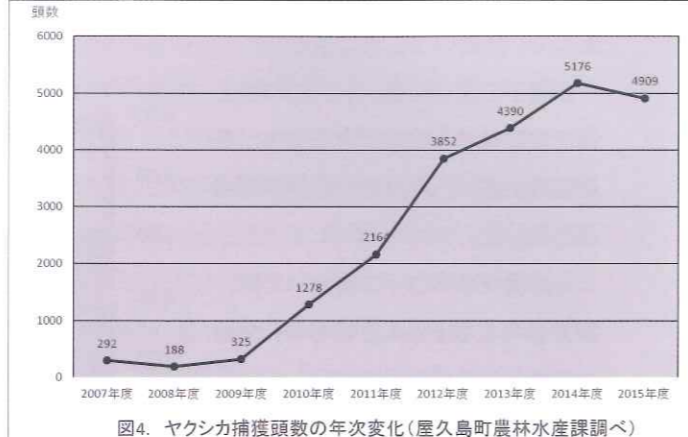
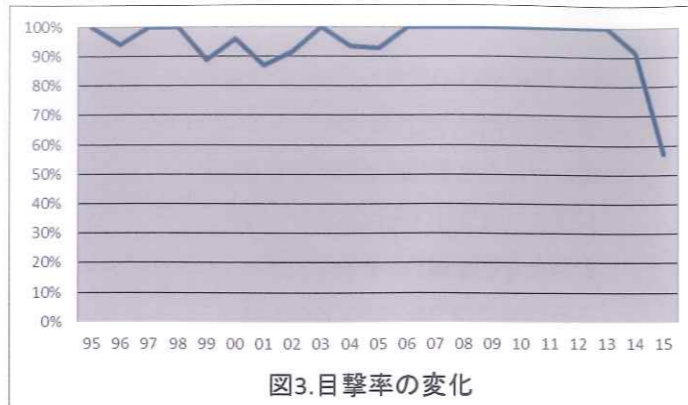
10000 円となり一気に年間 5000 頭という途方もない駆除数に増加した。単純に計算しても 5000 万円という巨額の税金が駆除に費やされたこととなる。

ちなみにヤクシカによる農業被害額を図 5 に示す。被害額が極端に増減するのは算定方法の変更によるとの話で、いまひとつ良くわからない。2010 年度以降異常に被害額が増加したのは、報奨金増額のための布石なのかと、うがった見方をしたくなるほどである。それにしても 2013 年度の農業被害額は、413 万円程度であるにもかかわらず、駆除の報奨金として、被害額の 10 倍以上ともなる 4390 万円もが支払われたことになる。なんとも尋常ではない税金の使われ方である。

2014 年の大量捕獲の捕獲場所を 1 キロメッシュ単位で地図に落としたデータ（環境省資料）を図 6 に示す。捕獲は基本的には里地を中心に行われており、宮之浦林道や白谷林道支線などで、林道に沿って奥地まで捕獲が行われている場合がある。

白谷雲水峡は鳥獣保護区となっており、域内での捕獲は行われていない。このため狩猟の影響で直接激減したということは考えられない。しかし基本的には開放系なので、里地を中心として大量捕獲が行われたため個体群が分散してしまった可能性が考えられる。この場合白谷雲水峡が過密であったために分散が起きたと考えることもできるが、そもそも白谷雲水峡がシカの生育環境として適していないために、より適した場所が空いたため分散したとも考えられる。適していない理由としては比較的成熟した森で林床が暗いということや、標高が 600m 以上と比較的高いため、標高の低い里地の方が植物の生産性が高いためなどが考えられる。このように大量捕獲が間接的な原因で激減したのであれば、捕獲をやめれば回復するのでそれほど問題は無いと思われる。

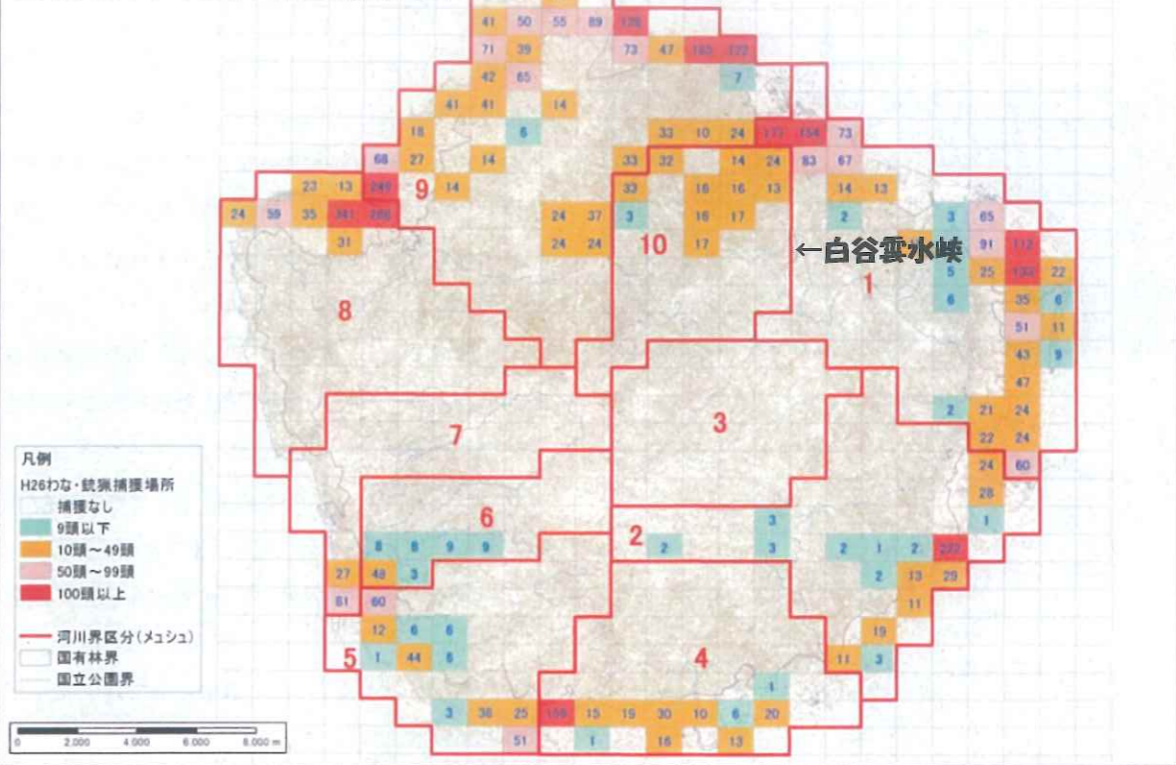
しかし昨年の夏以降同様に激減した縄文杉トロッコ道沿いのシカについて、「ふらふらと歩いていたシカがパタッと倒れて、ヒクヒク痙攣し、死んでしまった。」というガイドの目撃証言があり、またトロッコ道沿いでシカの死亡個体の数も急増しているデータも得られている（図 7）。同様の話は、白谷雲水峡のガイドの間



でも語られており、単純な分散というよりもトロッコ道沿いや白谷雲水峡内での大量死の可能性が高いのである。

ここで問題となるのが、大量捕獲されたシカの処理方法である。現在正規のシカ肉処理場で処理されるのは年間 500 頭程度である。猟師による自己消費もせいぜい数百頭と考えられる。そうすると残りの 3000 頭以上のシカは現場で処理されることになる。農林水産課によると埋設処理が原則との話であるが、報奨金を得るための申請は、捕獲個体の写真と尾・耳があれば良く、特に最終的な処分方法については証拠を提出

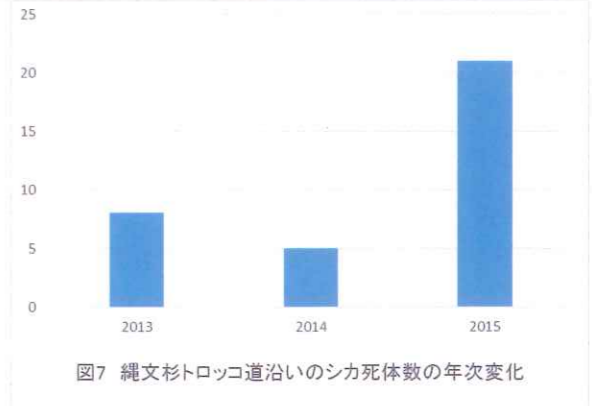
図 6. 2014 年度シカ捕獲場所地図



する必要はないようである。つまり実際にどのように処理されるかは猟師に任されていることとなる。万が一、適切に埋設処理がなされていないならば、森の中に何千頭もの死体が放置されることとなりこれが原因となって疫病が流行る可能性は否定できない。

日本ではまだ確認されていないが、北米ではシカの狂牛病（狂鹿病）が深刻な問題となってきているらしい。狂牛病の原因とされるプリオンは動物由来の飼料を通して、死んだ動物から生きた動物へ感染するといわれている。悪いことにヤクシカは死んだシカの骨を齧る習性があるのである。

白谷雲水峡は位置的には、白谷林道支線との距離も近く、狩猟が活発に行われている地域の隣接地となっている。同様に大量死が懸念されるトロッコ道は、白谷雲水峡からは峠を越えればすぐの位置である。つまり白谷雲水峡の周辺部で感染した個体が白谷雲水峡のシカに疫病をうつし、それがトロッコ道沿いにも広がったというシナリオが考えられるのである。もし駆除個体の死体が原因となって疫病が広がったとすれば、これはもう天災ではなく人災である。それが万が一にも狂鹿病で、この蔓延が牛などの畜産動物に感染しては目も当てられない事態となることが想定される。世



界遺産地域科学委員会のヤクシカワーキンググループでは、シカはいまだに全体としては増加している（平成 27 年度第 2 回特定鳥獣保護管理検討委員会及び屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクシカワーキンググループ合同会議要旨）と見ているようであるが、果たしてそのような悠長なことを言っている場合であろうか？屋久島のような狭い島の中で疫病が蔓延すれば、壊滅的な打撃を受けることは必至であり、速やかに原因究明と対策を講じる必要があると考えられる。

近年シカを害獣として扱うことが流行っているが、屋久島の生態系の重要な構成要素であると共に、貴重な観光資源でもある。全て人間が管理できるなどという幻想を捨て、冷静に共存の道を探る時期に来ているのではないだろうか。



「結婚パーティーをしたいんだけど、6月って大丈夫？」
長男からの電話だった。

4月に益救神社（ヤクジンシャ）で結婚式をあげて、今度は生活の場である東京近辺で家族と友達を招いてパーティーをするのだと言う。

「6月だったら大丈夫だよ、会場は決まったの？」

「うん、横須賀の農園」

「え、横須賀に農園があるの？」

「そう三浦半島は畑が多いよ。その農園も荒地地だったのを畑にして、無農薬野菜を作っているんだって」

「その農園のレストランってこと？」

「レストランと言っても手作りの小屋があるだけだから、基本は屋外パーティー。だからもし大雨が降ったら中止になるかも」

「6月って梅雨じゃない、それはすごい賭けだね」

「少しぐらいの雨の時はビニールハウスの屋根をかけるんだって。それにもし急に降ってきたら皆で小屋の中に入るし大丈夫だよ」

屋久島の雨を経験して育った息子と、家族旅行と言ったら小さいころから登山だったという理佳ちゃん（お嫁さん）の感覚なので異論はないけれど…一応披露宴ってやつなんだからここは新郎の母として他の方々のことを気遣う必要があるではないか。

「どんな人たちが来てくれるの？ 雨でも平気？」

「うん、ちぎりさん達とフェス仲間と前住んでいたシェアハウスの人達とか」

…ちぎり：佐藤契（けい）の呼び名。今から25年前彼が地域協力隊のようなもので屋久島にいた時からのわたしたち夫婦の友達。そして東京戸越にある「ちぎり亭」は彼と優子夫婦の家を拠点にしたひとつの『場』。東京で就

職した長男は「ちぎり亭」で育ててもらったようなもの。仙台出身の理佳ちゃんともそこで出会った。晴耕雨読の長井三郎さんに言わせたら「ちぎり亭は東京の難民キャンプ」だそう…。

「…うん、だったら大丈夫か」雨が降ったら降ったなり、風が吹いたら吹いたなりの対応を想定したら、後は天にお任せするしかないではないか。そう考えることができる人たちのはず。

パーティー前日、両親の手伝いはいらぬと言うので私たちは鎌倉観光に出かけたが、次男は神戸から到着してすぐに会場準備にかり出された。

「農園はどんなところだった？」と帰ってから次男に聞いたら

「畑の周りは森、カエルがすごい鳴いてた。ご飯もおいしかったよ」

「レストランはどうだった、自分たちで建てたんだってよ」

「うん、すごいよね。ねえお兄ちゃんあそこ高野家みたいじゃなかった？ なんか懐かしかった」

「ああ、そうそうそう、確かに高野家みたいだったよな」と長男。

「なるほど高野家か」と私たち夫婦。おそらくそれでイメージが共有できてるっぽい。

…高野家：トビウオ漁師であり書家でもある可二三（かにさん）とチワちゃん夫婦の、ここも解放区のような『場』。自分達が住む家は大工さんに教えてもらいながらも自分達で作るのは当たり前という屋久島移住の先輩家族。

屋久島にはそんな『人の場』がたくさんある。山尾三省さんは白川山（しらこやま）で詩をつくることで、日吉さんは「生命の島」という季刊誌で、いとちゃんはガイド業で、民さんは音楽でそのような『場』をつくっている。三省さん日吉さんは鬼籍に入ってもなおわたしにとっては大切な『場』であり続けている。

「その農園のオーナーが屋久島に居たことがあるって言ってたよ」

「え、本当？ 住んでいたの、どこに？」

「昔放浪していた時に白川山にひと月くらいいたんだって」

「ああ、それで今回の会場をそこに決めたの？」

「うん知らなかったよ、そのことは今日わかったんだよ」

「へえ？」

「三岳…かあさんが会場に三岳を送ったでしょ。それを見て屋久島ですかって聞かれて」

屋久島つながりはいつもこんな風に現れて来る。そして以前はそれにいちいち驚いたり何か特別なことであるかのように思っていたが、今ではなるほどここにも屋久島が広がっているぞと納得するだけだ。無農薬農業と分かち合うこと…その人がつくる紛れもない『場』だ。

パーティーの参加者は初めて会った人が多かったけれど、中にはYNA Cのお客さんで知っている人もいたし、「609」という憲法9条60年目のイベントと一緒にやった人達、短編映画を共に作ったメンバーにも久しぶりに会えた。そしてこれからきっと直接関わっていくであろう人々との出会いがいくつかあった。

4月に屋久島で挙げた結婚式の時は、何よりも理佳ちゃんのご両親との縁をいただき、そして今回のパーティーでもわたしは長男夫婦に世界を広げてもらったと思っている。

29年前ここに移り住んだ時からの人の縁がどんどんつながり『そこに在る人々の場』が現れたり結びついたりしながら『屋久島の縁』が益々大きくなっていく…こんなに嬉しいことはない。

長男夫婦も一緒に明るく開かれた『場』を作っていくと誓いの言葉を述べていた。「守る」だけではなく作る…そうよね。結婚や出産によって「守るべきものができた」とはよく聞く言葉であるが、家庭を持ったり子供ができた

からといって突然どこからか脅威が現れてくるわけではない。

闘う構えをとるからそれは脅威として現れてくるにすぎない。

たとえば昨年起きた口永良部島での噴火も含めて繰り返される自然災害に対して私たちは、そもそも自然をねじふせたり征服することはできないのだということを諦かに認め、物は破壊されても人的被害をださないよう周りの人々と互いに助け合うことのできる関係を作っていくことしかできないのだということを学んだ。

それは文化や意見の違う他国や他人そして自分自身もジャッジして排除していく今の資本主義経済の価値観とは真逆なことだ。この期に及んで自分だけの正義を振りかざして戦争なんかしている場合じゃないでしょ、とシンプルに感じる。

生物多様性・人物多様性・神仏多様性が広がり懐が深い、来るものは拒まない、そこに縁を感じる人も、都会のしがらみから逃れたい人もウエルカム…そして緩やかにつながる。

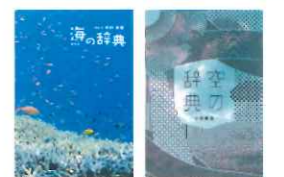
そんな人間関係と『場』があったらいいと思いませんか…実はこれこそが屋久島が今の時代でも持ち続けているエネルギーであり、つい近年までどこにでも広がっていた私たちの原初の関係性、DNAにインプットされている風景ではなかったでしょうか…というお話でした。

出版案内！

市川の著書が2016年内に雷鳥社から刊行予定。

屋久島のみならず、国内・世界各地の森で遭遇した木々の誕生、そして成長と死。

そこに生きる動植物たちの知恵を、美しい写真と言葉で綴ります。



既刊

「森の木々は、日々入れ替わり立ち代りし、次々と移り変わっていると言った方が良いでしょう。変化しながらも全体として変わらずに見える、そうした動的な平衡状態の中で、我々は屋久島の森を太古から続く森と呼んでいることとなります。（中略）変化しつつも変わらずに見える本質を捉えて、そこに真理を学ぶことが大切です。長い月日を経てのみ成立する森はまさにそのような学びの宝庫ではないでしょうか。」（まえがき一部抜粋）

『森の辞典』（写真・文 市川聡 予価 1,500円＋税 A6判上製）

VIVA! CUBA! 渡部幸

2016年1月から4月まで屋久島を離れ、ひとり中南米（トリニダード・トバゴ、ボリビア、ペルー、メキシコ、キューバ）を旅してきました。その中でもどうしても今年中に行きたかった国【キューバ】についていろいろ書きたいと思います。

カリブ海に浮かぶ島【キューバ】



私が【キューバ】という国に関心を持ったのは、青年海外協力でグアテマラに派遣されているときでした。

街中で売られている【チェ・ゲバラ】のTシャツ。「彼は誰？」から始まり、そして、電気も水道もない私の赴任地に薬をどっさり持ってきて、病院に行けない村民たちを無償で診てくれるキューバ人平和医師団たちとの出会い。そこで日本の本州の半分ほどの大きさであるキューバが世界最大の医療大国であり教育・文化大国であることを知り、興味が湧いたのです。

どうして今年中にキューバ訪問？

実は2007年に一度キューバ訪問を計画したことがありました。しかし、キューバ革命の立役者でもあり、当時、国家評議会議長でもあったフィデル・カストロ氏が病床につき、キューバは混乱の中という状況だったのでその時の訪問は諦めました。そして、そのまま時が過ぎ2015年。米国からの経済封鎖が解かれた今、社会主義から資本主義に大きく変わってってしまうのではないかと。そして本当にキューバ人は米国との国交回復を願っているのか。国交が回復することによって、良くも悪くも時が止まっているような風景を見られなくなってしまうのではないかと。行くなら今年がラストチャンスかもしれないという想いがあったからでした。

チェ・ゲバラよりもホセ・マルティ

降り立った空港の名は「ホセ・マルティ国際空港」。ホセ・マルティはキューバ独立の父と呼ばれています。いたるところで見かけるチェ・ゲバラの似顔絵やフィデル・カストロの名言。しかし、街の中心部や主要な場所に必ずあるのはホセ・マルティの胸像や肖像でした。



ホセ・マルティはスペイン植民地支配からの独立思想者で、キューバ革命はホセ・マルティの革命だ！と言われるほど。医療と教育を充実させるというフィデル・カストロの理念は「万人に平等な社会の実現を目指す」というホセ・マルティの思想が反映されていたことを今回初めて知ることとなりました。

時が止まっているような国

街を歩くと馬車や人力車、そして1950年代のクラシックカーが走っています。キューバ経済は、これまで半世紀以上ほとんど微動だにしておかなかったことがよくわかります。かつてはキューバの首都であったサンティアゴ・デ・クーバは昨年市政500年を迎えたそうで、そのパネル展示



がメインストリートで行われていました。やっぱり今も昔も風景は変わらないんだなあなんて思いつつパネルを見ていると、



「ん？」なんとたったの6年前！！それはそんなに変わらないでしょ！！

変わるもの・変わらないもの

中南米に旅行されたことある方なら経験があるかもしれませんが、アジア人が街を歩いていると「チーノ」もしくは「チニータ！」と必ずと言っていいほど声をかけられます。それはもう、ヤギやヒツジを見たら反射的に「めえー」と声をかけてしまうかのように（笑）。これは私たちからすると「中国人！」と国籍を言われていると捉えがちなのですが、彼らはアジア人の総称として使っています。興味深かったのは「チニータ」と声をかけてくる人たちと

話していると、「君はベトナム人か？」と質問されることが多かったことです。

いろいろと中南米をふらふらしていますが、「ベトナム人か？」と尋ねられたのは初めてでした。さすが社会主義国。

ちなみにアジア人は目が細いというのが彼らの認識なので、目が細い中南米人のニックネームも「チーノ」だったりします。つまり悪気は全くないんです。

けど、「チーノ！」と呼ばれるとやっぱり苛立つという方たち（よく路上で「オレは日本人だ！」や「韓国人だー！」と怒りを露わにしている人たちを見かけましたので・・・）は、カラーコンタクトをして街を歩いてください。そうすると「チーノ」攻撃には合わないそうです。ぜひ試してみてください（笑）

またチーノ攻撃は好奇心旺盛な証。みんなおしゃべり好きで世話好きです。このことに関してはたくさんエピソードがあります。例えば夕方バスを待っていたら、「この時間からのバスは混雑するから」とタクシーを拾ってくれ、さらにキューバ人価格（キューバでは外国人用通貨とキューバ人用通貨が違います）で乗せてくれるように交渉してくれたり、また現地で「カミオン」と呼ばれる乗り合いトラックを待っている間に隣のおねえちゃんと世間話をしていたら、私が乗りたいバスの集金係のおにいちゃん（キューバの乗合バスは運転手と集金係の人、二人一組で乗っていることが多いです）にその街まではいくらかかるのか事前にリサーチしてくれ、それ以上要求されても払っちゃいけないとこっそり教えてくれたりと、本当にいろいろと助けてもらいました。



カミオンの外観と内観

この交流こそ、ラテンの旅の心地よさ！だったのですが、資本主義の波が観光業に携わる人々の眼の色を変えていました。つまり個人的には「今年でも時すでに遅し」だったのです。タクシー運転手は医師の何十倍もの月給を手にし、言葉巧みに旅行者を観光に連れ出そうと必死になり、そしてキューバ人の平均月給よりも高い額のチップをくれる米国人旅行者を迎えるため首都・ハバナでは急激にインフラ整備が行われていました。

折しも米国大統領が88年ぶりにキューバ訪問という歴史的瞬間に私も立ち会うこととなり、全国民大注目の生中継では「CUBA recibe a OBAMA（キューバはオバマを受け入れた）」というテロップが妙に印象的でした。

また、2年前までは使用できなかったインターネットも、今では街のwi-fiスポット（有料）で自由に世界中と繋がるできるようになりました。

しかし、変わらないものもあります。それは国によって守られている地域。つまり世界遺産エリアと国立公園です。海あり、川あり、山ありと屋久島によく似た島・キューバの自然も気になり、今回の滞在中2つの世界自然遺産と7つの世界文化遺産のうち6箇所、そして3つの国立公園を回ってきました。

キューバ最高峰【トゥルキーノ山】

特に印象に残ったのはキューバ最高峰であるトゥルキーノ山（1,974m）への宿泊縦走登山です。1956年以降にフィデル・カストロ率いる革命軍が山中に「キューバ解放区」を作り、ゲリラ戦の拠点としていた地としても知られているマエストラ山脈の最高峰。登山道を離れたところにはコマンダンシア（指令本部）跡も残されています。



登山道には葉っぱの大きな植物が生い茂り、その足元はコケ植物やシダ植物に覆われていました。

九州最高峰・宮之浦岳（1,936m）山頂付近は森林限界を超えているというのに、ほぼ同じ標高のトゥルキーノ山は、まるで西部の森のようにヘゴが生え、亜熱帯な風景が広がっていることになんだか違和感を覚えました。



道中、現地ガイドさんと菓草や動物、そしてガイドの話などしながら歩きました。このトゥルキーノ山がある国立公園エリアの専属ガイドは8人だそうなのですが、ここ1年で急激に旅行者(ほぼドイツ人)が増え、それまでは週に1回登るかどうかだったのが、今は2日に1回までに増えたそうです。また、ガイドひとりではキューバ人なら70人まで、外国人なら30人までは案内するそうです。キューバ人と外国人の違いってなんだろう？言葉の壁か？など思いつつも、それでもひとりで70人も案内するという事に驚きました。

動植物の多様さ



バラコア地方にある世界自然遺産【アレハンドロ・デ・フンボルト国立公園】ではキューバで確認されている28種類の固有の植物のうち、16種類が生育しています。そして、世界最小のカエル、世界最小のハチドリなど珍しい生き物も多数生息していますが、中でもバラコア地方にしかないカタツムリ・ポリミータはこの公園の象徴的な存在となっています。私が今回見つけられたのは、黄色の殻を持ったポリミータでしたが、殻の色の多様性が高く、青以外の様々な殻の色をしているそうです。

また、キューバの国鳥「トコロロ(和名:キューバキヌバネドリ)」にも会うことができました。なぜ国鳥なのかというとキューバ国旗と同じ色(赤、青、白)を持っているからだそうです。そして、この鳥の名前は「トコロロ、トコロロ」と鳴くことから名付けられたそうです。日本でいうところの「カッコウ」と同じですね。なんだかキューバ人に親近感がわきました。



緑の溪谷・ピニャーレス



街中に突然島が現れたかのような景観の岩山。

そしてその周りはタバコ畑。ここでのタバコ栽培はトラクターを使わずに牛で畑を耕すというかつてからの製法を受け継ぐ農法。さらに、人々が歩んできた歴史によって形作られてきた建築や伝統が文化的景観として評価されたことで1999年に世界文化遺産に登録されました。



タバコ小屋と乾燥中のタバコの葉

ピニャーレス溪谷で栽培されたタバコからは、弾力性があり中の刻みたばこが崩れにくい丈夫な葉巻ができるそうです。キューバといえば葉巻。これは、有名なイメージですよ。

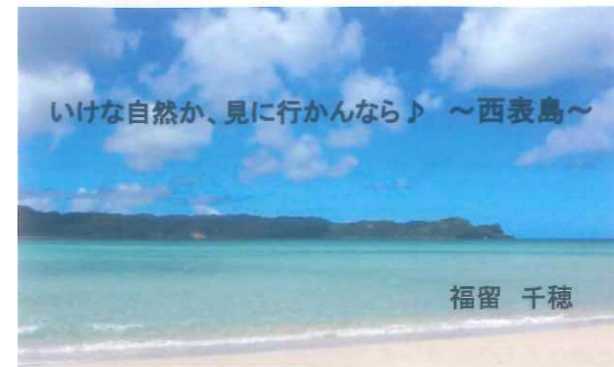
キューバ音楽は演歌だった!?

イメージを覆されたものもありました。それは「音楽」。キューバ音楽といえば、トロバ、ソン、チャチャにルンバ!と観光地に行けば、夜な夜な路上ライブが繰り広げられているのですが、キューバ人(特に若者)に音楽聴きに行こう!と誘われて行ってみると、ひたすら「レゲトン」が流れるクラブに連れて行かれます。「私はキューバ音楽が聴きたい!」とリクエストするも「あんな古い歌、おじいさんたちしか聴かないよ!」との答え…。なるほど。トロバもソンも、日本でいうところの「演歌」なのか。日本に来る外国人観光客もやっぱりJ-POPよりも演歌流れる酒場に行きたいのかなあ。



さて、いろいろ感じ、考えさせられたキューバの旅。よく海外では宗教と政治の話はするな。なんて言われますが、気になることが多すぎて、いろんなところで配給制度や国交回復について意見を聞いてみました。もちろん賛成派・反対派どちらもいましたが、私が危惧していることを話すと、「大丈夫。キューバは何も変わらない」と言った若者の言葉を信じ、また何年後かに訪れてみたくなりました。

やっぱり VIVA! CUBA!! (キューバ最高!)



「いけな自然か、見に行かんなら」～西表島～
福留 千穂

ツアーの時に、屋久島の位置を紹介し、屋久島が九州本土に近いことと、沖縄とは意外と距離があることに気づいてもらう。

屋久島の自然は沖縄とはちょっと違う自然です、と話しながら、正直なところ、沖縄の自然は、いったいどんな?更に南の八重山諸島の自然はどんな?と思っていた。

「こはいかん! いけな自然か、いっどどま、見に行かんなら! (訳:これはまずい! どんな自然か、一回は見に行かなきゃ)」と思立ち、6月に南へ飛んだのだった。

「山あり川あり海ありの島」

西表島に行くに当たって、軽く下調べをしてみると、緑で覆われている島だと判明。

しかし、標高は1番高いところでも、500m弱。緑に覆われていても、屋久島とは違う森っぽい。

また、川の河口部分はマングローブの森らしく、そこをカヤックで散策するのが主なツアー。まるでジャングルの探検ツアーのようだ。

鬱蒼とした森とは対照的な、広く明るい透明感のある海。ダイビングやスノーケリング、穏やかな海でシーカヤック。

何となく、屋久島と遊びの種類は似ているかもしれない。

「ジャングルトレッキング」

まずは森を見たい! 森を歩きたい!!
そこで選んだのが、「ユツンの滝ジャングルトレッキング」。

西表島でいちばんメジャーな滝は、「ピナイサーラの滝」。沖縄でいちばん落差がある滝だそうで、落差54m。観光客の大部分がそこを訪れるそう。屋久島でいうなら縄文杉のような位置づけなのかな。

ピナイサーラではなく、ユツンを選んだのは、森を歩いていくから。

「ユツンの滝」は3段になった、落差35mの滝。

滝壺まで行けるし、滝の上からの眺めも楽しめる。そこまでの道のりは、カヤックツアーが多い西表島でありながら、2時間ほど森を歩いていくトレッキングコース。

ジャングルの入り口は、オオバギやオオハマボウ(沖縄では

「ユウナ」と呼ぶ)、アダンが生い茂る藪。オオバギは、見た目アカメガシワに似ていて、性格は、やはりパイオニア植物。拓けた場所にすばやく生えてきて茂みを作る植物だと。



トウダイグサ科のオオバギに、フヨウの一種オオハマボウ。何となく、屋久島の海岸沿いの道路端の藪と似ている。

そして、屋久島では見られないアダン。熱帯的な雰囲気をもし出している。タコノキの仲間海岸端に生えて、潮の満ち引きのある場所にあり、マングローブの植物と似ている。

歩みを進めると、這い上がっていく植物の多いこと。モンステラに似た「ハブカズラ」。ジャックと豆の木に出てきそうなグルグルのツルの「モダマ」。



ハブカズラはツルがハブに見えるので、そういう名前が付いたらしい。ハブより、アオダイショウっぽいけど、そのツルにはよく見ると、貼り付くような根が出ている。ツルアジサイのツルに似ている。

西表島にはツル植物が多いそうで、特に溪流沿いには、このハブカズラは多いそうだ。

這い上がるハブカズラの他に、いかにも南国らしく生い茂っていたのが、コミノクロツグというヤシの仲間。高さはそれほど高くなく2~3m。「マーニ」と呼ばれるそうで、葉をかごなどの材料にしたり、葉柄の部分は釣竿に使ったりするらしい。しなりのある竿ができそう。

そして、森のいたるところで目立っていたのが、板根。木の根元が板の壁ようになって、体を支えている。

ギランイヌビワという木。イヌビワと聞いて、屋久島でよく見かけるイヌビワが浮かんだけれど、比べ物にならないくらい、樹高も高く、幹も太い。

板根の発達した幹を見上げていくと、幹にポコポコ丸いものが。「幹生果(花)」といい、幹に直接花をつけ、実になるんだそう。同じクワ科の「アコウ」も、そういえば、枝にポコポコ実をつけてる、それと同じだ!



「たくさん生き物」

森を歩いていると、いろんな生き物にも遭遇した。



白いマダラチョウのオオゴマダラが沢山、ヒラリヒラリと舞っていると、いかにも南国の楽園という感じ。蝶は、他にも、アサギマダラ、キチョウ、アオスジアゲハ、ミカドアゲハが目付いた。アサギマダラは、屋久島で見えるものよりも体が小さく、「リュウキュウアサギマダラ」というものらしい。調べてみると、西表島には、他にも「ヒメアサギマダラ」というものもいるらしい。また、キチョウは、屋久島や本土にいるキチョウとは異なる「タイワンキチョウ」という種類らしいが、飛んでる姿からは違いは分からない。タイワンキチョウは、その名の通り台湾と、日本では八重山諸島にしかいない。

湿った地面でたくさん集まって水分補給していたのは、ミカドアゲハ。ぱっと見、色調はアオスジアゲハなのに、羽に入る縦筋がまだらで、どちらか分からなくなり、ガイドさん(LBカヤック)に尋ねると、西表島では、ミカドアゲハのほうがアオスジアゲハよりよく見られるとのことだった。

色調的には、絶対アオスジアゲハだけだなあ、と何となく腑に落ちなかったが、調べてみると、南西諸島のミカドアゲハは、アオスジアゲハの色調によく似ることと、屋久島のミカドアゲハは青みが抜けてクリーム色っぽいことが分かった。屋久島のミカドアゲハを基準にしていたから、腑に落ちなかったのか、と後になって腑に落ちた。



そして、もう1つ、見たことない蝶「スジグロカバマダラ」。こちらマダラチョウで、ヒラリヒラリと舞い、色調が茶色～オレンジのグラデーションがあり、美しい。

昆虫では、他に、イリオモテモリバッタに会い、森では、クサゼミが鳴いていた。クサゼミは、その名のとおりに、草についている、体調1cmほどのセミなのだそう。姿は見ることができなかったが、シー————、という、セミというより、秋の虫のような鳴き声はずっと聞こえていた。

鳴き声では、「ヤエヤマハラブチガエル」の「カッカカッカカッカ」という、黄門様の高笑いのような鳴き声も聞いた。沢沿いの岩の下から高らかな笑い声を響かせていたが、姿は見られなかった。西表島にはかえるが8種生息しているらしい。

セミも種類が豊富で、9種見られるそう。屋久島では見られない、ヒグラシもいるそうで、その鳴き声を聞くと、夏の終わりを感じて寂しくなりますよね、とガイドさんと共感。

爬虫類では、西表ならではのものに、出会うことができた。

「セマルハコガメ」。国の天然記念物にも指定されている陸ガメ。まず、陸ガメなんてものを今まで見たことが無かったので、それだけで感動！このセマルハコガメは、身の危険を感じると、他の亀と同じように、甲羅の中に、手足や頭、尻尾を隠すが、隠すだけでなく、なんと、腹の甲羅をパカッと折り、頭の出口を閉じてしまうのだ！コンパクトに収納した上に、出口も閉じてしまうなんて、防御が厳重だ。頭を出すのをしばらく待っていると、恐る恐る頭を出したかと思うと、逃げるのは意外と早く、そそくさと草の茂みに隠れてしまった。

トカゲも面白いものに出会えた。

「サキシマキノポリトカゲ」。イグアナみたいな皮膚。顔。大体、木の幹の私たちの視線の高さの範囲にいるらしい。



そして、ササッと幹の裏に隠れても、その場からは逃げはしない。というのは、キノポリトカゲは縄張りが、木の上で決まっています、そこから逃げ出してしまうと、また、縄張りを取り戻すために一苦労するので、その場からは離れないのだそう。腕立て伏せのような格好でいるのは威嚇しているのだと。

「サキシマカナヘビ」。よく、下草の葉の上を伝い歩いている、とガイドさんから話を聞いていたが、本当に葉っぱの上には、全身鮮やかな黄緑色のカナヘビ。屋久島でよく見かけるニホンカナヘビもかわいくて好きだが、この色鮮やかなカナヘビには、一目ぼれしてしまった。



「イシガキトカゲ」。屋久島でもよく見るニホントカゲに見た目が似ていて、珍しく思わなかったのだが、実は、違うものだった。日本のトカゲ属では最小種らしい。

そして、沖縄といたらハブ。今回目にするのは無かったが、西表島にいるハブは「サキシマハブ」という種で、小さく、毒性も強くないらしい。咬まれた時も、一瞬クツとする程度らしい。しかし、毒は蛋白質を分解する毒なので、痛みはひどくなり、診療所で血清を打ってもらわないといけないそう。やっぱりハブは怖い。

たくさんの種類の生き物が見られる西表島は、ムシ好きの人たちにとっては、ワクワクが止まらない島だ。

「貴重な保護動物、イリオモテヤマネコ」

西表島といえば「イリオモテヤマネコ」。この島では、食物連鎖の最高位に立つのがイリオモテヤマネコ。魚やカニ、エビ、昆虫、カエル、トカゲ、鳥、コウモリなど、何でも食べるのだそう。

西表島は面積が300平方km弱の小さな島。そんな狭い範囲でヤマネコが生息できるのは、昆虫やカエルなどの両生類、トカゲなどの爬虫類の種類が多いからと言われているそう。

現在イリオモテヤマネコの生息数は約100匹。彼らを保護するために、車の制限速度は最大時速40km。それでも、交通事故は起こってしまい、今年は昨年よりも早いペースで事故が起こっているそう。



山から魚を獲りに降りてきたヤマネコが轆かれてしまわないように、歩道の幅を広くして早く発見できるようにしたり、車道の下に地下通路が造られている場所もあったり、保護対策がいろいろな場所とられていた。

「西表島の水」

西表島もいくつかの滝が見られ、そこを目指して、マングローブをカヌーで進んだり、森を歩いたりする。



西表の沢は、なんとなく懐かしい感じがしたのは、堆積岩の砂岩や泥岩がゴロゴロしていたからかもしれない。

屋久島の沢とは違う岩で、地元志布志の沢に似ていた。

蒸し暑いトレッキング。屋久島では、沢の水をどこでも飲むことができるが、西表島では飲めないらしい。「レプトスピラ」という病原菌が、イリオモテヤマネコなどの糞の中にあり、それが沢の水にもいるそうなので、飲むと病気になるらしい。年間10人ぐらいかかっています、とガイドさん。結構な感染者数だ。後から調べると、死にも至る恐ろしいもので、経口感染だけでなく、皮膚からの感染もあるそう。

それでも、沢にはオオクチユゴイなどの魚や、テナガエビなどもいて、生き物が棲めない水ではない。つつい、エビ獲りに夢中になってしまった。

「マングローブとサガリバナ」

実は西表島の第一の目的は「サガリバナ」だった。6月下旬から約1ヶ月しか見られない一夜限りのはかなく美しい花。花の形は、屋久島でも見られる「フトモモ」に似ているが、ぜんぜん別物らしい。サガリバナを見るために、早朝ツアーに参加。

サガリバナは、マングローブに生えていて、カヌーでその場所まで行く。早朝5時港を出発。海へ出ながらも、向かう先は川の河口。まだ月明かりの中、よくわからぬまま、マングローブを目指す。

だんだん明るくなる頃、マングローブのどこからか、独特の

甘い香りがしてきた。「まだ早いかも」と言っていたガイド(ばいばい)の近澤さんが、「咲いてますねえ」と、香りで判断。



緩やかな流れの上に、ポツポツと花が！！上流の方で咲いて落ちたものが流れてきたようだ。

アカショウビンやサンコウチョウの鳴き声を聞きながら、更にこいでいくと、沢山の花が！！ブドウの房のように、花を咲かせたサガリバナ。それに、スズメガやハチが集まってきて蜜を吸っている。その振動で、花がポトポトと落とされている。

しばし、甘い香りの中で、水面に浮かんで流れ行く、サガリバナの幻想的な世界を楽しんだ。



しかし、本当にこの花は一夜しか咲かないらしく、昼過ぎにその場所

に戻ってみると、木にも花はなく、水面にあったたくさんの花も流れて、しおれた花が少し残っているだけだった。切なかった。



明るくなってから、マングローブを見ると、メヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギなどが見られた。近澤さんの話では、マングローブをつくる樹木は日本に7種あるが、そのすべてが見られるのが西表島なのだそう。

マングローブ自体が屋久島にはほとんどなく、そこにいる生き物も、興味深かった。潮が引いて浮き出てきた砂地には、シオマネキやミナミトビハゼが多数。

シオマネキは、見た目によらず凶暴で、シオマネキを獲って食べるそうで、また、魚なのに陸地でも平気という生き方も驚きだ。



梅雨明けしたばかりの西表島は、気温が高く、晴天続き。天気予報の最低気温29℃、最高気温33℃という暑さに、参りそうだったが、そこに生きる動植物のたくましさを実感した。

屋久島にフェリーで到着。迫ってきそうな山々を前に、「ただいま〜！！」

屋久島は、この1000mから2000m級の山々があるため、降水量が多く、いつも雨が降ってる島と思われがち。しかし、梅雨明けするとカラッとした晴天が続き、その山々から吹き下ろしの風が吹くので朝晩は気温が下がり、夏はわりと快適。

同じように緑で覆われた島の自然でも、緯度や地形の違いで、自然の様子はだいぶ違ってくるものだと、身をもって実感。今度から、実感を持って、解説の前説ができそう。

縄文杉発見 50 周年に思う

松本 毅

1966年5月28日、縄文杉は旧上屋久町観光担当の岩川貞次さんが発見し、当初「大岩杉」と名付けられた。翌年の1月1日、南日本新聞の一面にその写真が大々的に載り「生き続ける縄文の春」というタイトルが冠され、その後の縄文杉が世に知られる最初の記事となった。南日本新聞の記者宮本秋弘さんは、記事の最後に「現代文明が振りかざした斧を収め、島が無限の安らぎを取り戻すことを願わずにはおれない」としている。当時大伐採が行われていた小杉谷の光景を見ての感想であった。

それから50年、半世紀の時間が流れ、縄文杉を巡る状況はどのように変わってきたのであろうか？

私と縄文杉・・・YNAC以前

87年に屋久島に移り住んだ時、私は縄文杉の存在を知らなかった。翌88年10月、移住1周年を記念して「縄文杉に行ってみようか」と十分な下調べもせず小さな子供を連れて登った。当時縄文杉への所要時間は往復8時間となっていたので、朝の8時ごろから歩きはじめた。5歳の長男は全行程を歩いたが、2歳の次男は時々私が背負った。すれ違う登山者は長男に「よくここまで来たね、もう少しだよ」と口々に励ましてくれた。結局縄文杉にたどり着いたのは午後2時前だった。根元で家族の記念写真を撮り、「大きいね」と言いながら抱きついてはぐるっと裏の方まで触りまくった。帰りは当然暗くなり、たった1本持っていた懐中電灯の明かりを頼りにトロッコ道を歩いた。荒川登山口についたのは午後7時を回っていた。今思えば、なんて無茶なことをしたものだ。この時の思い出として残っているのは、根元での記念撮影のときにセルフタイマーに間に合

わなかったことや暗くなったトロッコ道でかみさんが枕木の隙間に落ちたことな



どだけだ。当時、登山や植物には全く興味がなかった私には、家族ととにかく長い距離を歩いた、という記憶しか残らない経験だった。

縄文杉日帰り登山・YNAC

その後設立したYNACでも、初めは縄文杉の日帰り登山をフル稼働で行っていた。3日連続の縄文杉ガイドも当たり前だった。しかし、その年の秋にはYNACのツアーメニューから縄文杉日帰り登山を外すことになった。きっかけは、連日縄文杉ツアーに出かけていた小原が、ある日暗い顔をして縄文杉に行きたくないと言いだした。聞いてみると、「自分は今日縄文杉に行ったけど縄文杉を見なかった。自分がときめかないツアーなんてやる意味がない」というのだ。とはいえ、最も需要の多いドル箱としての縄文杉ツアーを手放してYNACはどうやって稼いでいくのか等、3人でさんざん議論をしたその末に出した結論だった。この議論の中で小原が言った「縄文杉は屋久島の森が生んだ子供だ」という言葉がとても印象的だった。

そうなのだ、私たちがぜひとも見て貰いたいのは、屋久杉を生み育てる森のすごさや多様性、そしていろいろな生き物が関係し合う生態系の面白さなのである。この時の縄文杉を巡る議論は、YNACにとっての根源的な議論だったのだ。そして、縄文杉以外のフォレストウォークがそこから生まれたのである。当初はお客さんから「縄文杉に行かないとはどういうことだ」と怒られることもしばしばだったが、充分な時間をかけて縄文杉に行かない理由とほかに素晴らしい森があることを丁寧に説明してヤクスギランドや白谷雲水峡のフォレストウォークを薦めた。そのことが結果的にお客様に大変喜ばれることになり、今につながっている。



世界遺産登録

YNACを設立した同年12月に屋久島は世界自然遺産に登録された。当時「ユネスコの世界遺産」は今ほど認知されていなかったので爆発的に観光客が増加したわけではない。しかし、屋久島の自然度の高さエコツアーによる満足度の高さによりじわじわと人気が上がり、観光客が増加した。それに連れてメディアによる縄文杉の露出度も増し、縄文杉人気は年々加熱していった。私が初めて家族と共に登った時はおそらく登山者は1日20人程度だったと思う。それが世界遺産登録後の1995年のゴールデンウィーク5月4日には1日で110人、1996年には展望デッキが設置され、根元までは行けなくなったが、人は増え続け2005年5月4日には300人、そしてとうとう2013年の5月4日には1日の登山者数が1,000人を超えた。

屋久島の地元では、2009年から「屋久島町エコツアー推進協議会」が発足し、エコツアー推進法（2007年制定）に基づく利用調整（入山者の人数を制限する）の検討が始まっていたが、すでに縄文杉登山は屋久島の観光業にとって重要な位置づけとなっていたため、環境省の1日360人に制限（自然環境及び利用環境の観点から）するという案に対して、地元は観光業に対する影響が大きすぎると反発し、結果「利用調整案」は2011年の議会で否決され、3年間かけた利用調整の議論はここで終了した。



50年・・・これまでとこれからの

過去の50年間は縄文杉を巡り「二つの受難」があったと言われる。先の25年は伐採の歴史、後の25年は観光をめぐる歴史だ。私が縄文杉ガイドをしていた頃、小杉谷のあちこちにかつての伐採の傷跡が生々しく残っていた。そして林業関係者から「森を見ているだけでは飯は食えない、木を伐らないと飯は食えないのだ」と言われた。しかし私たちには「森を見て飯が食える時代がきっと来る」という確信があった。しかし全体的な流れは、縄文杉ヘロー

プウェーをかける大規模観光開発が計画されたり、縄文杉というシンボリックな存在に依存をする観光に頼り切ってきたのが現状といえる。しかしいずれにしても島の経済や生活に深く関わる課題であり、開発か保護かという単純な問題ではない。

世界遺産登録以降、観光客の増加は駐車場やトイレの不足、登山道の不備、遭難事故の発生などの問題を露呈させた。それらの問題にはその都度委員会を立ち上げ、対策を取ってきたが、どうしても事後処理的対応といわざるを得ないところがあった。

果たして50年前、岩川貞次さんは今の状況を想像していたであろうか。林業から観光業へのシフトが急激だったせいか多くの場面において対応が後手後手に回ることも確かに多かった。

過去の事柄を踏まえた上でこれからの50年を考えた時、やはりYNACの設立趣旨である「エコツーリズム」の追求以外にはないと思う。エコツーリズムの島としてこの素晴らしい自然のもとでいつまでも暮らしと観光が共存していくことが願いである。

全体としての観光客の数は減少しているが、リピートしてくれる人の数など未だ屋久島は人気がある。しかしその上に胡座をかくのではなく山岳部においては、アクセス・トイレ・安全環境をしっかり整えることと同時に、あまり体力のない方にも十分に屋久島の森を楽しんでもらえるようなプログラムをつくるのが大事だと思う。

「縄文杉に行かなければ屋久島に行く意味がない」「もう体力がないから屋久島にいけない」という声の一方で「屋久島はここにいるだけで懐かしくて癒される」「20回くらい来ているけど、縄文杉には行かなくても満足」という人も多くいる。そういう満足感を提供するツアーを催行していきたい。

思えば屋久島のこの50年とは日本経済の変遷や浮き沈みとも連動していた。世界遺産に登録された時「周回遅れのトップランナー」だったがその後の20年で再び他地域に追い越されてまたまた後方に移動した感がある。少しずつしか成長できないけれど土埋木になっても腐らない屋久杉のように樹脂（脂汗）を流しながらこれまでに様々な現場で繰り返してきた丁寧な議論こそがこれからの屋久島のエコツーリズムを作っていくに違いない。

Calendar・2015-16

- 2015
- 7/5 松本・渡部・福留 映画【東京ウインドオーケストラ】にエキストラで出演
- 7/7-9 屋久島高校インターンシップ受け入れ
- 7/14,15 北海道大学ソテツ成分等サンプリング調査
- 7/24,25 台風の影響で四万十高校来島中止
- 7/31-8/2 岡山理科大学教員免許更新講習
- 8/4-6 小原 蘇苔類学会参加(ハケ岳)
- 8/8 市川 口永良部島島民向け桂福丸慰問落語会開催
- 8/9 市川 桂福丸春牧寄席を事務局として開催
- 9/1-5 岡山理科大学エコツーリズム技法実習
- 9/2 松本 和歌山大学へ講義
- 9/26,27 松本 旅博にてYNACブース開設
- 10/4,5 東京環境工科専門学院スノーケリング実習
- 10/6-8 松本 八戸ガイド講習会講師
- 10/9 松本 日立ポートサービスツアーのレクチャーのため熊野から日本丸に乗船
- 10/10 日立ポートサービスツアー受け入れ。ツアー中に急性心筋梗塞で一人亡くられる。慎んでご冥福をお祈りします。
- 10/16,17 東京環境工科専門学院スノーケリング実習
- 10/24,25 小原 銀座好日山荘にて机上講義
- 10/26 小原 大阪好日山荘にて机上講義
- 10/28 山の神祭り(益救神社でお祓いを受ける)
- 10/29 松本 沖縄からの視察受け入れ
- 11/5 市川・佐野 屋久島ブック2016のSKツアー取材対応
- 11/30 松本 関東屋久島会出席
- 12/6 市川 福岡放送 10 神アクター番組撮影でカヤック、ランド白谷を1日で巡る。
- 12/6-8 松本 屋久種子観光連盟風評被害対策東京出張
- 12/16-18 松本 屋久種子観光連盟風評被害対策静岡出張
- 12/18 綾町からの研修受け入れ(白谷・西部)
- 12/22 松本 環境省ガイド養成研修第1回検討会
- 2016
- 1/13-15 松本 屋久種子観光連盟風評被害対策関西営業出張
- 1/16 松本 信用金庫取材
- 1/19-21 松本 奈良県川上村にてエコツーリズムアドバイザー
- 1/22 松本 環境省ガイド養成研修第2回検討会
- 1/28,29 松本 旅行エージェント招待事業
- 2/3-5 松本 環境省ガイド養成講習基礎編 鳥羽 講師
- 2/7-9 松本 同上 軽井沢 講師
- 2/11-18 市川 ブルネイツアー講師
- 2/22-23 松本 環境省ガイド養成講習スキルアップ編 鳥羽 講師
- 2/25-27 松本 同上 軽井沢 講師
- 3/3-5 松本 屋久島町関東ファンの集い参加
- 3/9 松本 環境省ガイド養成研修第3回検討会
- 3/9 松本 銀座好日山荘にて机上講義
- 3/9-12 岡山理科大学付属高校研修旅行受け入れ
- 3/10 松本 モニタリング1000(サンゴ調査)報告会
- 3/16 市川 屋久島高校環境コース垂直分布調査実習

Contents

巻頭言	小原比呂志	1
白谷雲水峡のシカ個体群の崩壊について	市川聡・古賀顕司	2
回帰at屋久島	松本淳子	6
VIVA! CUBA!	渡部 幸	8
いけな自然か、見に行かんなら♪～西表島～	福留千穂	11
縄文杉発見50周年に思う	松本 毅	14

- 3/16-18 東海大学小林ゼミ研修旅行受け入れ
- 3/19-22 小原 赤十字講習会 鹿児島市
- 3/31 櫻村・池田・佐野退社 お疲れ様でした。
- 4/5 松本拓海結婚式 益救神社
- 4/14・16 熊本地震 震度7を記録
- 4/2 屋久島ジュエラのそらうみが YNAC に出店。出店は月数回ですが、カップアイスはいつでも売っています!
- 5/10-12 北海道の自然フィールドたび倶楽部ツアー受け入れ
- 5/15 渡部 安房川水難事故対処訓練参加
- 6/5,6 松本 銀座好日山荘机上講座
- 6/7 塩らっきょ仕込み
- 6/14-16 渡部 口永良部島復興支援ボランティア参加
- 6/20-23 福留 西表島自主研修
- 6/22-28 市川 ニュージージーランド(NZ北島の森を歩く。まさにジュラシックパークだ!
- 6/29～ NHK「さわやか自然百景」ロケコーディネート
- 7/1 YNAC 設立記念日 23周年を迎えました!
- 7/21-23 四万十高校研修旅行受け入れ(海援丸で入港)
- 7/29-31 岡山理科大学教員免許更新講習

執筆・取材記事

・カヤックフィッシングは冒険だ! (市川・佐野) 残念ながら魚が釣れなかったので、手づかみしてきました。屋久島ブック2016p54-55 山と溪谷社

編集後記

☆思っているだけでは理想は実現しないのですね、頑張ろう!
(た)☆庭でできたスモモをシェイク用に仕込みました。(じ)☆毎日泳ぐことが日課になりつつある今日この頃。素潜り時間が少しずつ延びてきました♪(さ)☆海の生き物にもなじんでいきたいと思う今日この頃(ち)☆ワーキングホリデーで娘が滞在中のNZ北島の森を歩いてきました。オーストラリアにカンガルーやユーカリが広がる前に分離したため、針葉樹と木生のシダが森を作る。恐竜時代の環境が目の前に広がっていました。ヤクスギランドの下層を背の高いヘゴが埋めているような世界です。世界は広く面白い。(い)

YNAC 通信(ワイナックつうしん) NO.33

発行日:2016年8月1日

発行:南屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦 368-21

TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-1850

E-mail: forest@ynac.com URL: <http://www.ynac.com/>

Facebook <http://www.facebook.com/Ynacyakushima>